

## 三浦氏のエベレスト登頂に何を学ぶ？

三浦雄一郎氏のエベレスト登頂は日本中に元気を送ってくれました。3度目、しかも80歳で！各紙もさまざまな角度から取り上げ、朝日の天声人語では、その偉業を我々の生き方と結び付けていました。このコラムの最終部分を私なりに展開してみたく、少々長くなりますがまずは全文を紹介します。



登った山からは下りなくてはならない。史上最高齢でのエベレスト登頂のあとの、三浦雄一郎さんの下山の苦闘を、続報記事がうかがわせる。無事に生還してこそ成功なのだと、自分に言い聞かせつつの一步一步だろう。細心と不屈に頭が下がる▼頂の栄光にくらべて、下りる行為は地味だが侮れない。事故はむしろ下山で起きている。東京への電話で、ご本人は「ふらふらで歩く幽霊みたい」と語ったそう。登ったら終わり、ではないから登山は厳しく、難しい▼三浦さんは、若き冒険スキーヤーだったときにエベレストに惹かれた。初登頂者ヒラリー卿の家を訪ね、飾られた写真を見てのことだ。「滑降したい」と言う「クレージー」と笑われた▼だが「やってみたらいい」と励まされた。「人間はいつだって不可能かもしれないことを超えてきた」と。三浦さんの信条である「目標を持って生きれば、わくわくできる」の源流だと、前にお聞きしたことがある▼三浦さんはその後、エベレストを高所から滑降し、今回は自身3度目の頂を踏んだ。英国隊の初登頂から今年で60年。今は天界に昇ったヒラリー卿も、冒険心を失わぬ80歳のがんばりを見守ったことだろう▼青春とは年齢ではなく、心のあり方だと言われる。似た意味で、高齢の人には三つのタイプがあるとも言われる。まだ若い人、昔は若かった人、そして一度も若かったことのない人。快挙に励まされて「まだまだ若い人」が世に増えそうな、明るい予感がする。(5月26日)

「青春とは心の若さである」——サムエル・ウルマンの言葉からでしょうか。高齢者の三つのタイプを分析すれば：

「まだ若い人」——年をとっても肉体的にも精神的にも若く未来への目標を持っている人、あるいは肉体的な衰えや故障があっても精神的にはいつまでも夢を抱いている人。

「昔は若かった人」——若いころは元気はつらつだったが、年齢を重ねた今は夢もなくあるがままに流されている。若い時に抱いていた生気や意欲が感じられない人。

「一度も若かったことのない人」——ずいぶんきつい言葉ですが、若いころから夢も持たず、燃えることもなく中途半端で“若年寄り”のまま年を重ねてきた人。



誰もが「まだ若い人」でありたいでしょう。三浦氏の快挙に「ようし、自分も・・・」と発心したシニアも多いのではないのでしょうか。とはいえ、三浦氏は99歳でモンブランを滑降した父親の血を継ぎ、元来が頑健で素質や才能が与えられていた。普通の人がどんなに頑張っても手が届くのは難しいでしょう。

でも、誰にでも他者に勝っているものがあります。それは自分で定めた自身の生き方です。登山に例えれば「我が人生の頂上を目指せ！ということになるのでしょうか。私自身の夢は、これまでも述べてきましたが、創価学会創立100周年となる2030年までに広宣流布

(世界平和)に最大限の貢献をしていくことです。そのためにはまずは頑健な体づくり。



今はマンションの自分の部屋までエレベーターを使わずに足で上るようにしています。エベレストに比べれば高さは300分の1弱、たった7階までですが(それに氷点下の気候に雪渓、酸素不足や危険度など比較にはならない)自分にとってはそれなりの挑戦です。

人は他人の姿と行動に刺激されて自らの生きざまを振り返り発心していくことが多い。今はその時。三浦氏の実績は私たちを発奮させるに十分な刺激的行動です。「そんなこと言われなくても分かっている!」・・・余計なお世話だったらすみません。

